

## 第八章 破獄語り

### 1

昭和二十一年八月十五日、白岩由吉は江別郊外三原の小さな川のほとりで、二人の警官により逮捕された。

丁度敗戦一周年を迎えた日であった。

十勝岳を下り、さまよい歩いた彼は、旭川あたりに辿り着いた時、やっと日本の敗戦を知った。すっかり人々の表情も街の様子も変っていた。

貧しい農家の米倉に入ってもわずかの量しか盗まなかった彼なのに、貧しかった農民はいまや、富裕な農家に変っていた。

食糧難の折柄、街ものは着物や、書画骨董など金目のものはみんな米や芋などの食糧に代えている時代であった。

金持の土蔵荒らしをやってきた彼なのに、いまは手当り次第、大体どこの農家の蔵に入っても、およそ農家には応わしくない品々が手に入った。

ラツキーストライクなどというアメリカの煙草などもカートンごとあり、缶詰類やチョコレート、豪華な着物、巻物の絵、カメラやラジオまであった。

まるで、どこかの質蔵に押し入ったようなものである。

金目のものがたやすく手に入るの、彼の懐もあたたかくなっていた。

それでも、彼は用心して昼間は余り出歩かず、山中でよくうたた寝をした。

ある夜のことであった。

空知（そらち）の尾白利加（おしらりか）川沿いに歩き、畑地に出て道を横切ろうとした時、彼はとつぜん、一人の若い男に六尺棒で殴りかかられた。

男は野荒しが出るので畑地に身を屈めて夜番をしていたのだ。

「おめえ、野荒しだべ」

「おらがア？おらこの睦道歩いているだけだでばな」

「もう、許さねえぞ」

いきなり、六尺棒で彼は足を払われた。したたかに向う脛を打たれて、一瞬、彼はたじろいだ。男の腰には皮の鞆におさめられた一挺の鉞があった。

「おらはなんもとつてねべ」

六尺棒がまた払われたので、今度は彼が攻勢に出た。低く構え、頭突き姿勢のまま、相手の腹部にぐわーんとぶつかった。

男は引っくり返り、逃げようとした。その時、大声で「野荒しだつ」と叫んだ。

関わり合いになるとうるさいので、彼は逃げようとした。が、男は必死で、彼の片足をしっかりと掴んで放さなかった。

前の晩、隣家の農夫がやはり夜番をしていて二人の野荒しを見つけた。

若い男も、戦果をあげるべく張り切って

いたところだった。

彼は足を取られた時に前倒しになった。その隙に、威嚇のためか男は腰の鉈を抜き放っていた。二人は立上り、向い合う恰好になった。

「野荒しは叩つ殺してもいいことになっている」と若い男が高言した。

誰れかが、畦道（あぜみち）の向うを走って来るのが見えた。加勢人だった。眼の先で、鉈が一閃した。

殺される。と思った。

咄嗟（とつさ）に彼は男の手から鉈を奪っていた。足で利き腕を蹴り上げたら、鉈を落した。揉み合いの中、彼が鉈を手にした。男は再び六尺棒を手にし、槍のように真直ぐ突いてきた。横ざまに逃げ、その拍子に彼は鉈を横に払った。

男の腹部を深く傷つけていた。

男がうずくまる。血の飛沫（しぶき）を見る間はなかった。

そのまま鉈を投げ出し、闇の畦道を走りに行った。が、不幸なことに、この若い男は腹部の傷が深傷（ふかで）で、処置も遅れたことから腹膜炎になり二日後に病院で死んだ。

白岩由吉はこの時、第二の殺人行為を犯してしまつたのだった。

やらねば自分がやられる、そんな切羽詰まつた状況であった。これでまた追われる身になった。滝川方面に向って逃げ、山中に潜む。

彼はまた山籠りを決意した。

翌日、沢地の近くの雑木林で、夜中行に備え、仮眠していたらとつぜん、近くでズン！ズン！と銃声がした。

見上げた空は真蒼で、眩ゆいばかりであった。

「こりゃさ、だだ（たいへん）山狩りだべ  
もう眠気も吹っ飛んだ。」

あわててはね起き、山中に駆け込もうとした時、また近くで「ズン！」と銃声がし、続いて犬共の吠え立てる声が四、五十メートル後方に聞えた。

まさに脱兎の如く、彼は山中目がけて吹っ飛んだ。野荒しを警戒していた男を傷つけた。いや、死んで いるかも知れない。

山狩りは充分にあり得る話であった。

犬共が走り寄る前に、沢地に降り、匂いを消すためにせせらぎの川を渡った。

沢地の向うの小高い叢林の奥に逃げ込んだ。実は、これは彼の早とちりだった。

北海道に駐屯していた日本駐留役の進駐軍の将校連が、薙子（きじ）撃ちに猟犬を連れて山中に入っていたのであった。

だが、そんなことは露知らぬから、彼は夜通しで山野を駆け、美唄原野のあたりまで逃げ伸びた。

更に、岩見沢の駅に出、夜間を見計って無蓋車の貨車の車輻の一つにもぐり込み、江別まで逃げた。

一昼夜のうちに六十キロ近く足を伸ばしたことになる。これは人間技ではないはず

だった。山狩りされた地点から彼は最高の素速さで遠去かったのである。

それで、少し気持の上で安心感があった。江別市内に入り、小さな川のほとりに降り、彼は汗臭くなつたシャツを洗い、ついでに水浴びをした。

丁度シャツも乾き、小ざつぱりした時、川原に二人の警官が降りてきて不審訊問された。たまたま前夜、近くの畑地で野荒しがあつた。

江別署には十日ほど前に発生した尾白利加川近くの村の若い農夫殺しの情報も入っていた。

挙動不審者と見られたのだった。

持物の風呂敷包みを開けさせられる。

錠前破りの常習者だから針金に合鍵、ロップ、それに脇差しに似たドスが一挺出てきた。それでも警官はていねいな口をきいた。どう見ても怪しい持ち物だった。

「いやあ、お手数をとらせました。どうぞ、元通りにしていただいて結構です」

実は、この時、彼の胸は激しく高鳴っていた。半ば観念していた。いや、川を突っ切り、瞬時に逃げ去ることも考えていた。

一人の警官の眼に、風呂敷包の結び目を固くしぼる男の両手首が見えた。

手錠が嵌められたままのように、手首には三日月形に似た傷跡が印されていた。

白岩由吉の手配書をこの警官は何度か見たことがあつた。手首の手錠傷、そのことも明記してあつた。気付いた警官が連れに

目配せした。

「あの、別に不審な点はないのでありますが、一応、署のほうにご同行願えますか」  
「このところ毎日、顔見知りでない人は七、八人はこうしてお付き合いねがうんですよ。ほら、他所者（よそもの）を見ると、この村のものは失礼なことだが、みんな野荒しかなんかと思っている。まあ、お名前と現住所、本籍、その程度のことをきくだけですから」

二人の警官が交互に彼に声をかけてきた。この時、白岩由吉はなぜだか、逃げる気力を失なった。

自分に反抗してくる者には徹底抗戦の構えをとるが、人間的に、ていねいに扱われると途端に戦意が喪失するのだった。

この時がそうだった。四十歳という年齢のせいもあつたかも知れない。

もはや、時代は変っていた。

タコ部屋なども廃されていたし、徴用工などへの強制労働も、もう、アメリカ軍指導の下、とつくに、解かれていた。

すべてを理解していたわけではないが、民主警察が生れて、今は警官も威張り散らすことはできないのだと、耳にしたこともある。なぜだかこの時、白岩由吉は妙に落着いていた。警官の喋り口がこれまでとは考えられないほど穏やかなものに聞えた。少なくとも犯罪者を扱う口調ではなかった。

「おらは脱獄七回だ。これで捕まってもう一度逃げたら八回になるべ」

何か胸が騒いだ。

自分は刑務所に戻れば英雄扱いされる男だという思いがあった。

「おら、もう一度逃げたら、記録破りい、八回になるべ、もう一度、同じ台詞を口の中で繰り返していた。」

久しく忘れていた脱獄行為への緊張した思いが胸に甦った。

連行した男は素直に従ってきたが、白岩由吉だと見破った警官は気が気ではなかった。いつ逃げられるかも知れない。白岩由吉の超人ぶりについては尾鱈（おびれ）がついた話を耳にしていたから身を固くした。相手に不動金縛りの術をかけておいて、悠々と一人逃げ伸びるといふのもその話の一つだった。

丁度その時、青年団の寄り合いの帰りらしい若者が、七、八人、橋の手前までやってきた。橋を渡り切った地点で、

「お前は、白岩由吉だろ、逮捕する！」

と、お手柄の警官は大声をあげた。

眼の前の捕物劇にわっと青年団の連中が加勢した。網走刑務所を脱獄してから、ほぼ一年九カ月の歳月が経っていた。

手錠を引き千切るという話はこのあたりでも聞えているとみえて、江別署に連れて行かれたら途端に、札幌刑務所から係官がとんできた。厳重監視下におかれた。2

白岩由吉の身柄は直ちに札幌大通刑務所に送られた。現在はこの刑務所はなく法務省管轄の建物となっている。昭和二

十一年十一月五日に減刑令により第二刑懲役三年を懲役二年三カ月に減刑された。

たまたま、刑務所に視察に来たGHQ（連合軍総司令部軍）の係官に直訴、非人間的なこれまでの拘禁状況を訴えようとしたことがあり、たぶん、裁判所側は法務矯正局の行過ぎの非を一部認められたので、減刑措置をとったのであった。

だが逃走中の殺人致死事件については第一審判決は死刑と出た。

この時、札幌高裁の判事は、脱獄常習犯の白岩由吉を判決後いさめた。

「お前はこれまで数度の脱獄行為があるが、いずれも逮捕復監させられている。何度逃げても、所詮、逃げ了せるものではない。今度で脱獄を意図することは止め、心から罪に服し、刑期を完うしてはどうか」

だが、この時、白岩由吉は昂然と胸を張り、不敵な笑いを口元に浮かべて判事に言った。

「なんも、今度の裁判さも不服がある。あいだば正当防衛だんだ。畦道ごと通っただけで襲いかがられた。殺す気だのねがった。だども無抵抗だば相手に殺されでだがもわがらね。刑さは服すけど、まんだふつとじふつうに人間扱いしねいんだば、いつでも逃げでやるはんでな」

大いに彼は不満を述べ立てた。

昭和二十一年十二月十六日の第一審で



は死刑判決、第二審を待つ身となった。

翌年の二月十七日に札幌苗穂（なえぼ）刑務所に移送される。

札幌苗穂刑務所はその名のとおりに、田んぼに囲まれ、その周囲は泥田や蓮田などの湿地帯となっていた。元々、開拓使庁の用度庫を改修して作られた牢屋で建物自体は明治の初め頃からあった。

ところが、昭和二十二年四月一日、つまりこの刑務所に移されて三十三日目に、またまた、白岩由吉は第八回目の脱獄に成功することになる。

運動場に出ても張りつくように二人の看守がそばで見張っていた。

相変らずの傍若無人ぶりで、若い看守などは彼に坊や扱いされた。

食物が悪いと注文をつけたり、運動時間が短縮されたりすると受刑者を代表して、所長に面会を求めたりした。

それだけに、受刑者仲間からは人気があったのである。

彼は入所してからじつと時機を待った。刑務所側は、苗穂の施設が古く、いつ逃げられるかわからなかったのも、特別に、白岩由吉を収監する舎房だけを作り直した。タモ材の床板に張り詰め、扉も鉄製のものとし、扉の外にもう一つ鉄格子を設けた。

鍵もそれで二重のものとなった。

ただ、彼は薄笑いを浮かべていた。

「おおお、たいした歓迎ぶりだな。」

でもおら、王様扱いだべ」

彼は悪い気はしなかった。

またたく間に刑務所中に、脱獄魔白岩由吉の名は響き渡った。

実際には、彼は眼にしていなかったが、戦後の民主主義で報道管制が解かれたことから、脱獄魔白岩由吉の名は新聞でも英雄扱いされて、報道されるようになった。丁度、時期柄、共産党の大物闘士が次々と釈放されて大見得を切っていた頃のことであった。時流に聡（さと）い連中が、人権問題なんぞと口にして騒ぎ立てし、網走刑務所の時の苛酷な扱いのことなども、これまた得意顔の新聞が恰好のネタとして報じたのだった。

特設の独居房に入れられた時、まず、彼はにやりと笑った。下にもおかないもてなしなどというが、看守はみんなびりびりしていた。

実際に、網走刑務所の川合所長や当時の幹部は、白岩由吉の逃亡により、拘禁の苛酷さが世間に知れ、しかも、新民主主義などというものがはびこっていた時代だから、刑務職にあった者たちは極悪人のようにされ、終戦と共に退官を余儀なくされた者も多かった。

あくまでも個人的な報復心でしかなかったが、ひとまずのところ、白岩由吉は一応は復讐の目的を果たしたのであった。

得意満面、ひとわたり、白岩由吉は房内を見渡してから、

「こいだば、すつかど、おらのために建てだ、新居だべな」

と、担当看守に言った。

まだ木の香も新しいタモ材の床板が彼の足元には隙間なく敷き詰められていた。だが、その時、彼の頭の中にあつたのは、次の逃走方法だつた。

十勝岳の麓の造材小屋にいたから、新しい木材の性質を知っていた。

この時、彼は床板に関心を向けていたのである。どこかに隙間が出来ると思つた。すでに、乾燥して隙間が出来ること。考えてか、フローリングの板の間には差し木がしてあつた。一応は隙間のないようになつていたのである。

二重式の扉の発想は、脱獄魔白岩由吉が、錠前落しの名人であることの用心と思われた。二重、三重の檻の中に入れておけば、もはや逃げることは叶わないはずだつた。

「すつかど、馬鹿げだ考えだべ」

と、彼は思った。天井も破つたことがあるから、ここも補強されている。

「まあ、のんびりやるがあゝ、そう、嘯（うそぶ）く。」

逮捕されたのは暑い盛りだつたが、この苗穂の刑務所に移されたのは二月二十七日のこと。いちばん寒さの厳しい時だつた。この特別改造の監房はすでに三ヵ月ほど前に完成していた。

彼の裁判途中に、法務省の関係者がそ

れなりに智恵を絞ったのである。

彼の王様ぶりは、飯の盛りつけから、副食の量にまで影響した。

徒らに刺激して逃げられては困るので、大抵の要求は刑務所側がのんだ。

担当看守も、彼の召使いのようなものだった。しかも、まだ審理の過程を残していたが、一審では死刑の判決が出ていた。今度逃げられたら死刑脱獄囚の名が冠されるのだから刑務所側の責任は重大であった。

が、入所二日目にして彼は、この特別舎房の欠陥を見つけ出し、脱獄への自信を得た。床板には当然のことながら釘が打ち込まれている。

だが、てこの応用で一枚の板を持上げれば、何本釘を打ちつけていようと彼を力をもってすれば剥がすことなどわけではない。塀を越えるだけが脱獄ではない。彼は頭の切換えをちゃんとしていたのである。手には何も道具がなかったが、また彼は同じことを考えた。

やはりここの舎房にも、便器の木桶が隅においてあった。

刑務所内部の事情が彼には幸いした。

これまでの脱獄歴を詳細にひもとけば、彼が脱獄に用いた小道具やその使い方なども熟知されていてしかるべくだった。が、お互い、刑務所の恥となることだから、通り一遍の公文書しか添付されては来なかった。

彼はまた、木桶の籬（たが）に眼をつけた。今度は両手も両足も自由だった。

補強部分の差し板を先ず外せば床板は引き剥がすことができる。ただ、この刑務所は昼間はいやに静かであった。

二重扉なので、視察孔から観察される時は先ず外の鉄枠扉が開錠される。それで、看守が来ればすぐにわかった。

刑務所側は用心のあまり、結果的には自分たちの立場を不利にすることにうなづいた。このことは彼の作業をすすめる上でも好都合のことだった。

夜七時から九時までの自由時間に流される所内のラジオ放送の音も、彼の作業を大いに助けてくれた。

彼が入所した初日にひらめいたのは、床下に穴を掘り、塀の外にのがれることである。今度は脱獄記録だけのことではなく、かなり真剣になっていた。

第二審が残されていたが、一審では死刑の判決を受けていた。

正当防衛が認められない限り、絞首台で命を絶たれる運命にもあった。

木桶の籬（たが）を外し、隙間に針金を差し込んで床板を浮かせて行く。

釘がニセンチ間隔に打たれていたが一度、床板の端を持上げればあとはわけはなかった。

彼はここでは特別の客なのか、捜検もない。実際に「よびこみ」と言って虚偽の用件で、看守を房内に呼び人質にとつ

て逃走する例や、強襲の手荒い方法もあったから、看守はなるべく、彼には近寄らないようにしていたのであった。

約一カ月後の四月一日の真夜中に、まんと白岩由吉は脱獄に成功した。

この刑務所は湿気が多いから、せいぜい太陽の光にあたらな<sup>い</sup>となあ<sup>い</sup>。

運動時間<sup>に</sup>一人の受刑者が言った。

たしかに、泥田地帯で、雨でも降れば、たちまち、道はぬかるみになってしま<sup>う</sup>。運動場の土の上だ<sup>って</sup>じとじとしていて柔らか<sup>か</sup>かった。

真夜中、床下にもぐり、剥がした板で穴を掘<sup>つ</sup>たら一時間ほどで三十メートルは掘れた。素っ裸の作業であ<sup>つ</sup>た。

地下水が湧いて出た。顔と手足ぐら<sup>い</sup>は洗えた。寢床の下に床板の穴はあ<sup>つ</sup>た。試し掘りを一時間ほどしただ<sup>け</sup>で、脱出に自信を持<sup>つ</sup>た。

やはり、雨の降る日を待<sup>つ</sup>た。

春を告げるのか、日中からしと<sup>し</sup>とと雨が降<sup>つ</sup>た。

就寝時間の九時がすぎ、明りが暗<sup>くな</sup>った頃、準備をはじ<sup>め</sup>、午後十一時には、床下の穴にもぐり込<sup>ん</sup>だ。

まるで、もぐらの行進だ<sup>つ</sup>た。

堀の外までは七十メートルはあ<sup>る</sup>。

タコ部屋で土工人夫をして<sup>いた</sup>彼のことでだから、なんの苦にもならな<sup>か</sup>つた。

午前一時すぎには堀の外に出<sup>て</sup>いた。

刑務所の外の蓮田に行き当<sup>り</sup>、いきな

り彼は多量の泥水をのまされた。

蓮田の泥沼から出て来た男は文字どおり泥人形そのものだった。蓮田の水は彼の掘った穴に逆流して行ったはずだった。近くの川に飛び込み、体を洗う。

刑務所の建物は基礎工事のコンクリート打ちがしてあったが、浅かった。

この刑務所に移されて三十四日目に白岩由吉はまた自由を得ていた。

八回目の脱獄であった。

夜道をひた走りに走り、その間に、札幌近郊の農家から何日分かの食糧を手に入れた。札幌を南にと下り、藻岩山の山中に入った。

いまでこそ札幌近郊というと街の体裁を整えているが、一步山に踏み入れれば、原生林が鬱蒼と生い茂っていた。

どこまで行っても樹海で地元の人でさえ山菜とりに入ってしまったまま行方不明になり命を失なうことがあった。

そんな時代のことである。

やはり、彼は藻岩山の中腹から山狩り部隊の動向を眺めた。新聞、ラジオが大々的に、白岩由吉の脱獄をまたまた報じたから、札幌近郊はどこへ行っても白岩由吉の話で持ち切りとなった。

町内会を通じて白岩由吉の手配書も配られた。

人相・身長 五尺二寸。

体重十四・五貫 小肥り、丸顔。

ただし下顎骨は強く張っている。

頭は丸苧り、特に額せまく、鼻翼張り、大口にして唇薄し。服装は青色の獄衣、紺のジャンパー、綿入チョッキ、茶色のコール天ズボン。また、特徴及び性格として、次の説明が附された。

右手首に環状の明瞭なる傷跡あり。

本人は既に脱獄数回の常習犯にして、性格は陰うつ寡黙。

時に残忍なる兇暴性を發揮する。

特に動物的な復讐心の所有者で一度受けた怨恨は終生忘れない。

膂力（りよのよく）衆にすぐれ、

普通の手錠は簡単に捻じ切り、柱に打ちつけた五寸釘を歯で容易に引抜く。動作は平常は極めて緩慢なるも事に際しては驚ろくべき俊敏さを見せ、脚力は一日に三十里

（一二〇キロ）

札幌近郊のニュースは、もちろん北海道中に知れ渡り、網走刑務所の看守たちも、またあいつがやったのか、と歯ぎしりした。もつとも胸をなでおろした者もいる。

同罪を相憐む心境を持った者もいたのであった。それに戦時中のこととは言え、昭和十七年九月二十日には、秋田刑務所の鎮静房を破獄、三カ月歩いた末に、東京・小菅刑務所に自首した人物だから、中央紙も、早速のこと、白岩由吉の脱獄ニュースに



飛び付いた。まさに日本を挙げての、英雄ぶりの扱い方だった。

もちろん、山中にある彼はそんな騒がれ方は知らなかったが、山狩り部隊の動きを足下にみながら、お山の大将の気分を味わった。

連日の大捜査網にもかかわらず、この時も、北海道の深い原生林は、稀代の脱獄魔白岩由吉を樹間の奥にと隠してしまった。

### 3

白岩由吉は四十一歳になっていた。人生五十年と言われた時代である。

彼は体が小さかったので乙種合格になつたまま結局、戦場には引き立てられることはなかった。通算すれば十数年も刑務所暮らしをした。戦時下の愛国心云々の考え方ももつてすれば、まさしく国賊の一人ということになる。

実際に、都会地などでは、軍需施設などの構外作業で受刑者が敵機の爆撃のために多数の死傷者を出していたし、また食糧難の折柄、戦時行刑の実態は、栄養失調死者、脚気による死者を、これまた、多く出していた。

刑務官もまたしかりで、職務中に殉職した者、実際に戦地に狩り出され不帰の人となつたなど数知れない白岩由吉はその点では、運のいい男であった。

藻岩山に潜伏してのち、余市岳から札幌

市内にほど近い手稲山の山中を彼は常住の場所とした。藻岩山から西北部に約十四キロ離れた手稲山は明治の頃から金、銀、銅が発掘されていて、昭和十八年金山を閉鎖していた。

知来の鉾山とそっくりの廃窟跡が各所にあり、人家とも遠く距てられていることから、彼は体一つで、手稲山に移り住んだ。

春だったのが、まだ山の各所にはザラメ雪が残っていた。寒さもまだ厳しい。

彼の見つけた廃坑の穴は陽当りもよく、恰好の場所だった。

敗戦二年の時代でまだ人々の気持は荒んでいた。特に札幌市は人口が集中し、食糧難にあえいでいる時代であった。

相変わらず、彼は近郊の農家の物置庫に入り、わからぬ程度に必要な品を掠めとっていたが、なぜか近頃は孤独感に苛まれることがあった。

食糧を手に入れ、そして、進駐軍物資などの物珍しい品々を目にしても、なにか彼にはそれらのものが、無用のものに思えた。吉峯老人のことがしきりに思われたり、北大雪の山小屋で熊の襲撃に遭い無惨な死を遂げたヤスエのことが思われた。

岩穴から一人、夜空の星を眺めていると、その星の一つがヤスエのようにも思えてくる。余り光らない星で、星雲の群れから一つ離れて、ぽつんと光を放っていた。

さも、この星がわたしだというように、なにか申し訳ない気持になると、次に、

若くして死んだ妻のふじ子の星を夜空に求める。おらは死刑だびよおん。捕まればおめだちのどごさ行くことになるべなア。

そんな時には自分の命が惜しくはなくなる。だが、途端に持前の反抗心が頭をもたげた。

どこまでも上げてやるべと、自分自身に言い聞かせた。

秋田刑務所の鎮静房、それに網走刑務所の特製戒具の手枷・足枷、あんなひどい仕打ちさえされなければ、おれは脱獄は重ねなかつたかも知れないとも考えてみる。

事実、行刑史の中では、暗黒の時代の彼は生き証人でもあつた。

白岩由吉が引き千切つた二つの手錠は今も残されているが、特製の手枷・足枷は関係者以外その後だれも見っていない。

手枷・足枷につながれたまま、獄死していたら、この行刑の暗部の実態も明るみに出ることにはなかつたろう。

むしろ、刑務所側はうがつた見方をすれば、そのまま獄死を願っていたのだったかも知れない。

もはや、永久にどこからも逃げられなくなり、彼の場合も一件落着となつて北山墓地の無縁墓に、吉峯老人同様に葬むられたことであつたろう。

彼は、穴籠りする時の習性で、やたらに、食糧ばかりを貯め込んだ。

餓死することの怖ろしさがつねに頭にあつたからだつた。だが、近郊の農家の蔵を

荒らしているうちに、段々と、彼は緊張力を失なつて行つた。

前は苦勞して食糧を集めた。

あまりにも貧しそうな家の前は避けて通つた。自分も腹を空かしているが、この家のものも渴えていると考へたものだつた。それなのに、札幌近郊の農家はどこも裕福だつた。蔵に入れば、揃わぬ品はなかつた。あの、野荒しにまちがわれ、襲いかかられた一件も彼の頭の中には強くこびりついていた。

農家の人間共がみんな敵に思へた。

闇の食糧を代替物にして手に入れた農家には応わしくない品を見つけるたびに彼は、盗みに入つたことも忘れ、それらの品を叩きつけ、踏み壊した。

外国製の蓄音機やレコード盤、一幅の油絵、花壺、硝子製の飾り物、日本人形……どれも彼のこれまでの暮らしには無縁の品ばかりであつた。

夏も半ばになつた頃、彼は手稻山の廢窟跡を出た。

たつぷりと食糧は残されていた。

ラッキーストライクの煙草も何カートンか残つていた。みんな捨てた。

なぜか一人で腹を立てていた。

札幌の街に近いということが自分の性に合わなかつたのである。雑多な人間がうようよしていた。人間共が群れている暮らし向きに、馴染めぬものを彼は感じていた。

また山を越え彼は一人歩き出した。

はつきりと考えていたわけではないが、山に入り、あの少年の頃に会った源蔵という男のようにマタギの一人になろうかとも考えていた。

旭川まで山の尾根を歩いてやってきたのは九月半ばのことであった。

「こんな季節に山に入ることは自殺行為だ。自分でもそう思っていた。」

それなのに、彼は北大雪の山々を目指していた。造材小屋を雪が深くなるまでに見つけようと考えた。

「おらのごと呼んでるのはきつとヤスエだべ。」山中を歩いている時、よく彼はヤスエのことを思い出した。

秋の一番危険な季節に彼は大雪山系に踏み入っていた。一挺の猟銃と実弾を持っていた。やはり盗品だったが、熊の奴が出て来たら一発で撃ち止めてやろうと考えていた。心ばかりが逸っている。

なにかに立ち向っていないと、彼は生きていくの気がしない人間になっていた。

のんびりと穴蔵暮らしなどしてはられないという思いがあった。

「おらがヤスエごと知来の村がら連れ出し、してがらあ、一人、山の中さ、捨ててくだ。」そんな辛い気持を噛みしめていた。

根雪が山を閉ざす前に、造材小屋を見つけた。その小屋を拠点に、彼は、ヤスエの遺体を隠した岩穴を探した。

「一緒に死にます。ほんととはここに来る前に納屋で首くくって死のうと思つたど

も、勇気がなかった。ほんとはあんたに殺されたいと思つて、ここへ」

知来の洞窟を出る時、ヤスエはそういつて彼に取りすがつた。

ほんとうにその通りになった。

死ななかつたのは彼だけだった。

心中の片割れになったまま、彼はまだこの世を逃げ、さまよっているのだった。しかも死刑囚という汚名をわが身に背負つて――。

沢地を下つた層雲峡谷の小さな横穴を彼は見つけた。秋のことで、彼が菩提所（ぼだいしょ）にした場所にはあの赤桃色のオオサクラソウの花は咲いていなかったが、横穴の前の台場の土に、オオサクラソウはしっかりと根を張っていた。「ヤスエ、おら戻つてきたどう。おらがこの世の中おなごで、いちばん好きだった女子はヤスエ、おめだ。ほれ、このとおりだア」

彼は愛の表現など知らなかった。ただオオサクラソウの根元に唇を押しつけ、そして泣いた。

まだ、彼は、ヤスエを餌食にした熊に復讐をしたという思いにはなっていないなかつた。どこかであの手負い熊は生きているかも知れない。猟銃を肩にしていたのもその復讐心の表われであつた。

ヤスエが眠っている場所に戻つたら、ますます、愛する女を歯牙にかけた熊の存在が許せなくなつた。

この性格が、想像を絶した破獄の行為を成し遂げきたのであった。今更、なめるものでもない。また彼は執鬼（しゅうき）の一人になった。

秋の半ばにしては強い陽射しが樹間の梢の先には見られた。熊笹の茂みが揺れたように思えた。

用心深く風下に身をおいた。

一頭の巨獣を倒すことが、ヤスエに対する愛の証しなのだった。

この行為には自分の命がかかっているのだ。いや、なにかに立向う、この反抗心と、緊張力は自分の肉体を苛めぬかれただけが持つことのできる一種の快感の感覚なのかも知れなかった。

この地に来てすでに二匹の熊を仕止めていた。いずれも若熊だった。

小手試しはもうすんでいた。

のそりと一匹の雄熊が立上った。

優に、二メートルはある大物だった。

猟銃を構えたまま、じりじりと彼は距離を詰めた。じつとりと額に汗が浮かぶ。至近距離五メートルだった。

明らかに無暴だった。

彼は、はつきりと雄熊の右手の爪が潰れているのを認めた。あの時の手負いの熊だ。そう確信した。

不死身の雄熊が、いま、彼の眼の前で怒りの声をあげた。両腕を高く上げ、首を上にあげた。

白い牙が剥き出しになった。

襲つて来る一瞬だった。

雄熊の心臓部目がけて猟銃の銃爪を引いた。血しぶきが立ったが、まだ雄熊は突っ立ったままだった。

突進してきたのは攻撃本能のせいだったが、あつという間に距離は縮められていて、彼は百キロは優にあるかという雄熊にのしかかられていた。同時に熊の右手の先が、彼の横腹を搔いた。強い力が加わっていた。同時に雄熊も横向きになり、はずみで後に引っくり返るような恰好で、かたわらの草むらに転り落ちた。雄熊の体重の重さからは解放されていた。彼は四つん這いになつて逃げた。

吐気がして、今にも気を失ないそうだった。

雄熊はなおも彼に立ち向うとし、体勢をとりもどそうと、もがいていた。

気丈に、彼は投げ出された猟銃を手にとり、やつとの思いで立上ると、続け様に、雄熊の体に盲滅法（めくらめっぽう）に銃弾を乱射した。

なにか、幻の絵を見ているようだった。銃弾を発射しているのが、誰れかもわからずに、ただ執鬼になった男が目前の敵に銃弾を撃ち込んでいた。

幻の血生臭い光景は、いつか、遠い世界のものになつて行つた。

白岩由吉は、そのまま、膝を折り、崩れ落ちた。ただ、白い闇の底へと彼の肉体は引きずり込まれて行つた。



薄ぼんやりした幻の世界から目覚めた時、白岩由吉は、病院の一室に横たわっていた。彼が、手負いの熊と対決している時、地元の猟友会のメンバーが、層雲峡谷の上流地で銃声を聞いた。

それで、猟犬を先頭に駆けつけてきたら、一頭の巨熊が撃ち倒され、その傍らに、白岩由吉が人事不省になりうずくまっていたのであった。

最初に担ぎ込まれたのは、上川の病院だったが、彼が意識が回復しないうちに、脱獄囚白岩由吉だと名が知れた。眼覚めた時も、彼の顔をのぞき込んでいたのは警察関係者だった。

鹿皮のチョッキを着、皮製の長靴を履き、銃を肩に背負っていた時の彼は、いっぱしのマタギにも見えなかったが、今は、ただの脱獄死刑囚にしかすぎなかった。

幸い、彼の受けた傷は大したことにはなかった、ほんとうなら、熊の鋭い爪で、横っ腹を抉りとられているところだった。が、熊の利き腕の先は、彼が前に死闘の末、鉋で爪先きを叩き切っていた。

それに、銃弾が胸を刺し貫ぬいていたから腹に加えられた力も削がれた。

ふつうなら内臓破裂になるところだったが、単なる打撲傷で終わった。

運もあったが、やはり、白岩由吉は不

死身の男なのだった。

もつとも、猟友会のメンバーに助けられたお陰で、また彼は警察に捕まる身となった。

四カ月後には退院となった。

警察病院ではないから、また脱走されてはと、この時は、見張りの警官が扉の外や病室の外の窓の周辺に十数人も張り付いた。

上川から、警察の護送車に乗せられ、所轄の札幌刑務所大通支所に身柄を移された。

「おら、もう逃げねはんで」

彼は大通支所の看守たちに口癖のように言った。ほんとうに逃げる氣力を失なっているように見えた。

精悍（せいかん）な面構え、がっしりした肩幅、強靱（きょうじん）（きょうじん）（きょうじん）そうな足腰、それらは獣を思わせたが、鋭い眼光はいつの間にか消えていた。

妙に威張り散らす看守も居なくなっていたし、なにより、看守たちが彼に氣を遣った。

あの、巨熊を撃ち倒したことで、自分の人生はみんな終わったような氣にもなった。力で向って来る者には力で対するこれが、これまでの白岩由吉のやり方だった。それは相手が人間であれ、兇暴な熊であれ、そんなことは関係ないのであった。おら、いつでも死んでやるぞ。妙に度胸も坐っていた。

これまでに二人の男を殺（あや）めたのは事実だった。首をくくられても仕方がないと自分に言い聞かせていた。

脱獄を八回果した―

なにか、生きていくことの目的を失なつたような気分にも彼はなつた。

誰れだって、おれの記録は破れまい、そんな思いだけがある。脱獄鬼、五寸釘寅吉のことなど、もう忘れていた。

昭和二十三年六月十七日、札幌高等裁判所で第二審の判決があり、農夫殺しは相手側の過剰防衛も一部認められて、白岩由吉は無期懲役、逃走加重罪三年の判決を受けた。

この時、はじめて、彼は、裁判長に心からの一礼をした。

正当防衛を主張してきた彼の言分を、この時の裁判で認められたからだつた。これは当時、食糧不足から野荒しが横行、実際に各所で殺人事件も起り、また婦女の場合は、体を代償にされたなど眼にあまる行為などもあつたので、裁判では世情も斟酌（しんしゃく）されたむきもあつた。

白岩由吉はこの時、深々と頭を下げたあと、裁判ではじめて大粒の涙を流した。命を救われたこともそうだったが、人の話に耳を傾むけてくれる裁判官がいたことに感激したのであつた。

「無期懲役は終生の懲役刑を意味するが、改俊（かいしゅん）の情有あり、ま

た服役態度良好の者にいては、社会復帰の途も開かれている。以後、脱獄することによって反抗的態度を示すことなく、事件を起した二件の物故者に対して服役を通して成仏を願って頂けるように、どうか真面目に服役して頂けることを願っています」

裁判官はそうことばを締め括った。

二審判決後、約一カ月後の、昭和二十三年七月三十日に、北海道管区長指令により、白岩由吉の身柄は東京・府中刑務所に移送されることになった。

5

故郷の青森県を出て、二十三年ぶりに、白岩由吉は青函連絡船の三等船室に乗った。思えば、吉峰老人の骨を持って、竜飛崎を訪れるはずだったのに果せなかった。いまは九人の看守に身を守られて、シヨツパイ河を渡る身であった。

丁度、夏の季節、オオセグロカモメが連絡船のマストの上を掠めて行く。もう、北海道の島影を振り返ることはしなかった。抜けるような青空だった。

北海道の寒さなど感じさせないほどに夏の太陽がじりじりと甲板上には照り返っていた。

どこか違う国に行く、そんな思いもした。あまりにも眩しいのだった。

「なあ、白岩、無事につとめあげればな、

また青函連絡船にも大手を振って乗れるようになるぞ。まあ、故郷に帰れなくとも男一匹、お前ほどの根性のある男だ。その気で頑張れば、人生又楽しということになるぞ」

責任看守の男が言った。

腰縄に、前手錠だった。

あまり、舷側に寄らないように看守長が強く手前に腰縄を引っ張っていた。

なにか、可笑しくなつて白岩は笑いそうになつた。手錠を引き千切つて、津軽海峡に身を投げられると折角の九人編成の大護送団の狙いも水の泡となる。余り、そちらに行くな。とは言えないものだから目一杯、腰縄を引っ張っているのだつた。

実際に、彼も目撃したことだったが、青函連絡船は大部分、戦争中の敵機の爆撃で損傷し、運航回数も減っている。

残された一隻のうちの大雪丸だったが、途中、海の真中で機関故障を起した。

青森港寄りだったので、左に下北半島、右に津軽半島をはっきりと望むことが出来た。丁度、青函航路の平館海峡に入る手前の海面であつた。

恐山山地の突兀（とっこつ）とした山々と青い海がなにか際立った対称を見せていた。眼を転ずれば、やはり青い海を従えて、津軽山地の低い山脈が列なっている。こちらはまさに夏の訪れのさなかにあるように、自然の景観の美しさを見

せてくれた。

「もうなんも思い残すことねえな。船までおらのために、こしだどごで、停まっただけなものなっ」

彼はすっかりご機嫌だった。青森港に着くと、すぐに鉄道の引込線のある場所まで連れて行かれた。

「白岩由吉は特別のお客さまだからな」

だれが考えたのか白岩由吉のために一輛の貨車が用意されていた。函館から護送の貨車は用意されるはずだったが、大部分が進駐軍に接收されていて手配がつかなかった。お陰で彼は青函連絡船の旅を楽しむことができたのだった。

「こんだばお客さまでねえでばア。おら、荷物だが」

「まあまあ、おれたちも総勢九名、お前と一緒に荷物になるんだ。ま、待遇のほうは、おあいこということにしてくれよ」

看守長がうまいことを言ったので、白岩は納得した。

「まあ、長い道中だども、よろしくおねげえするがア」

護送囚人一人に九名、その上、有蓋貨車一台の借り切り、彼は悪い気はしなかった。有蓋車が利用されることになったのは、衆人環視の中で、逃走劇を演じられてはという心配もあったが、当時は今よりも進駐軍優先の時代、事実、青函連絡船に乗っていた乗客のうち三分の一は

進駐軍の兵士であつた。

また、当時、横暴にふるまっている悪評高い闇屋連中の第三国人も多く見られたが、彼らとて、進駐軍の前では、借りてきた猫で、日本人相手には空威張りをしていただけのだが、権力者に対してはおとなしくなつた。

噂には聞いていたので、そういう連中を見かけた時は、白岩由吉は、じろりと侮蔑の眼差しを投げた。

訳も分からず、そのように威張る卑怯な連中は、みんな嫌いであつた。

青森駅の操車場から有蓋貨車は東京に向けて出発したがもの一時間も走ると、夏のことで、閉め切つた貨車の中は、焙（い）られた鉄板と同じ状態になつた。小さな窓が上部の一つあつたがそんなものは風を引き入れるには何の役にも立たない。刑務所側は白岩由吉一人に対して特別の配慮を払つた。

いまにも壊れそうな木の寝台だったが、彼だけのために用意した。

あとの九人の看守は、固い貨車の上にゴロ寝の状態であつた。

なによりも貨車の中の暑さにみんな参つた。扉を半開きにして風を引き入れる算段などできるはずはなかつた。

みんなすつかりうだり上り、駅に着くたびに看守の一人が水筒片手に水の補給に走つた。白岩にとっての楽しみは食べることだけだつた。

駅弁が自由に売られている時代ではなかったから、貨車の到着時刻に合わせて、各管区の刑務所、支所から係員が弁当を運んできた。たしかに、網走刑務所とくらべると食物の質は悪かった。

列車の到着時間によつてはめし時に大きくずれることもある。これまでの白岩だと噛みついたが、全員の汗とほこり、それに煤（すす）にまみれた顔を見てさすがに黙った。

道中、彼は機嫌のいいほうだった。

「どんだべ。おら、いま頭ん中でなに考えでるがあででみるや」

なにしろ退屈なこと、この上ない。

「そんだなあ、おらが逃げるがどんだが大問題だべ。んだ、はんで九人がかりでおらごと東京さ連れで行ぐだものな。おらの逃走計画ごとおめだぢさ、知かせであげば、これだば、卑怯でねえものな。ンでも、逃げられれば、あんだだぢがいちばん悪いごとになるでばな」

「おい、ぶっそうなことを言うな。ほんとうにその気なら自由にはさせないぞ。何といおう、と縄でがんじがらめにしてでも連れて行く」

責任者の平田看守長が本気になって怒った。彼の手には護送のための手錠が嵌められている。

これまた特製であつた。鉄具ではなかつたが、頑丈に造られていた。

「なんも、冗談、冗談。参考までに教え



でおぐずごととは逃げねってことでねが。まあ、岩手の盛岡近辺 だら裏山さ、入り込めば奥羽山脈の山々だべ。おら、マタギのようなもんだはんが。十年でも二十年でも 生きられる」

がたごとと、レールの軌轍音（きてつおん）、規則正しい音を立てていた。

「次に危ねだば、岩手がら仙台までだなア。東北線は川に沿って走るはで、その気になってひよいって 川さ飛び込んでしまえば、おらなたて水泳ぎだば、赤蛙（びつき）ってわらしの頃しゃべらいで だぐらいだはで、大得意だしな」

「次はどこだ」

看守長は喋るだけ、喋らせておくつもりだった。

「そりや東京さ近付ぐほど危ねきや、みんな油断すべえ。これがら四日か五日はかかるびよん、このぶんだば。あただち、長旅どこの暑さでぐったりだべ。おら、根っちよ深はでねばっこいその頃だば、おらの勝ちどいこうだべな。はは、こりや冗談だ。府中刑務所の元木所長はおらのいちべえん尊敬する人だはんで、もう迷惑かげねごとにすでばな」

どこまでが本気なのか、看守たちにはわからない。いちばん困るのは排泄の世話だった。小駅に止まった時に用をたすのだが、看守が一度に四人もついた。

「用便」（はこべん）といわれる逃走方法の刑務所用語があるぐらいだから、用便

中の逃走も多い。手錠はしていたが、いつ引き千切られるかも知れない。

みんなびくびくものだった。

「ちよつと、ぐれ、扉開けべえよ。これだば、人間の蒸し焼きがでぎあがってしまふべな」

鉄蓋車なのだから、真夏の太陽が真上から照りつけている。それに東に向うほど、暑さは増して行つた。小駅に着くと、あわてて扉を開ける。水呑場でも駅構内であれば全員が、ホースを借りてきて水浴びをした。

九人もの看守を引きつれての東京行き、白岩由吉は暑さにバテ気味の看守たちに言った。

「秋のカニ工船だのこしたもんでねえなのだ。船底だの ってもう蒸しぶろだ。水浴びのできるわけもねし、汗出るはで口の中サ塩ばばつと放り込んで、塩の補給なんだ。あんだら、まだまだ我慢足りねどう」

6

二日目にやつと、奥羽山地の険しい山々を右手に見ることの出来る北上盆地あたりに貨物列車は差しかかった。もう、看守たちは暑さと緊張でぐつたりとしているのに、白岩由吉はますます意気軒昂（いきけんこう）だった。

さしずめ、わが脱獄罩（だつごくた

ん）を語っている図で、この話ばかりは、看守たちを退屈させなかった。

稀代の脱獄魔とは聞いているが、みんながみんな、白岩由吉の凄まじい脱獄話を知っていたわけではない。

「秋田刑務所の鎮静房はあれは仏さまのお慈悲があつたんだべ。人間が人間ごとこしたにいじめでいい訳ね。おらが逃げられだのは仏さまのお導ぎがあつたはでだなあ」

みんなシーンとなる。

貨車の中には敷藁が持ち込まれたので、看守たちは少しは坐り心地がよくなった。相変らず、固定された木製ベツドの上で、一人あお向けに、王様然として、白岩由吉だけが寝ている。

他の連中は背を屈め、膝を折って、敷藁の上に坐っていた。

「何日目だつたがな。やつと真暗闇ではなくなつて、天窓が半分だけ開けられたんだア。そのどぎな、鎮静房の天井の隅さ蜘蛛の巣が張つてあつたのせえ。これまで真暗だはんでわがねくわかないであつたども。あの蜘蛛の糸さぶら下ればいいなと考えだ夜、おら夢ごと見だのさ」

天 upper界から悪しき人間共を救うために蜘蛛の糸をお釈迦様が地上に垂らしたら、人々に謙譲のところがなく、一度に蜘蛛の糸に多勢の人間がぶら下つたので、蜘蛛の糸が切れ、悪しき人間

共はまた地上にふり落されたという、そんな説話があったのを看守の何人かは思い出した。

その話が白岩由吉の頭の中にもあったのかね「夢ん中で、蜘蛛の糸がすーとおらの眼の前に下ってきた。そんでき、おらは眼が覚めた」と、彼は一人の語り部（べ）になった。

実際は、蜘蛛の巣が天井の隅にあつたのを見ただけだった。

蜘蛛の糸にすがることができたらと考えたのは事実だった。

「お前は、あの、鎮静房の鉄の壁をよじ登ったというじゃないか」

話に引き込まれ、看守長が膝をのり出す。ますます白岩由吉は調子に乗った。

「ああ、素足に素手だべ。あれだは忍術使いでもあしたにうまぐ行くはずねえな。おらの祖先は忍者ねえべはかあ」

ほんとうは、あの時、足の裏のすべりを止めるために、上衣を脱ぎ、足裏に巻きつけて鉄の壁をよじ登った。

「まったくぐやもりだべな。ここだば暗くてわがねんだども、おらの掌と足の裏さは力仕事したり山の中 駆けめぐったはんでな。手だご足だごできるのせえ。だはんで鉄だつてなんだつて、ぺたんこと吸い付くだでばな。昔の忍術使いみたいなものだべな」

「忍術かあ、そりや、ほんとうのことか？聞きしに勝る術でねえか」

「ンんだ。山の中走るだっておら、爪先立ですいすいと歩く。歩ぐずより走るんだべな。息吸うのだって、一つ吸って二つ吐ぐ、これだば息が切れねえはんでこえぐ疲れるなねべせえ」

「気合術もか」

看守長は、ほんとうにこの男が気合術を使うのかどうか、護送にも関係のあることだから前々から関心を持っていた。

「うんだ。空飛ぶ鳥ごと落とすのはほんとかだ。うつと腹の下の天枢（てんすう）つうどごさ力入れて、眉間のどごろさ念力集めで、やあーっ！」と声掛ければどんな鳥でも落ちてくる。おら山の中で怪我して食物失ぐなっだどぎでも気合術で鳥落して食つて命助かったごとあつたものな」

もう、白岩由吉の独壇場だった。

暗くて顔はわからなかったが彼は得意満面の顔になっていた。嘘の話に、皆なは、ますます酔った。

「やあーっ！」

と、気合いまで掛けてみせた。

みんな暑さを忘れた。

全身が打たれたようになり、中には心臓のあたりに痛みさえ感じた者もいた。

空飛ぶ鳥の発想は、あの命を助けられたシマフクロウの残り餌の鮭にあやかっただものだった。

おおいに、みんなを楽しませた。

北上駅に着い時、平田看守長の特別の

計らいで、ところ天がガラスの深めの皿に入れられ十人前、持ち込まれた。

氷で冷やしてあったわけではなかったが、白岩由吉は何十年ぶりかの素朴なふるさとの味に、舌鼓みを打った。

食べたあと、看守長に、

「うまかねえ。これえ、ありがたいことだねえ。おらもう絶対に逃げねはで、安心してける。おらまじめにつとめで、もし仮出所できたら、この、ところ天の金払うはでな」

と、私費で買われたところ天に彼は感激してみせた。

ほんとうに彼は逃げる気を失くした。

この、貨車便で東京に送られる最中、彼の胸は高まっていた。真暗闇の有蓋車の中で、どうやって逃げるかあれこれと策を練っていたのは事実であった。

盛岡あたりから奥羽山地へ、東北線の川沿いの小駅か、仙台あたりが狙い目だった。宮城刑務所があり、東北では法務矯正局の大幹の地であった。

灯台元暗し、第一審の控訴申立てにより宮城刑務所にも昭和十一年九月から二カ月ほど在監していた。

地理は詳しくはなかったが、列島脊梁部の山中に逃げ込めば絶対に逃げ了せる自信はあった。一山越えれば山形県で、ここには泥棒行脚の時に一時住んだことがある。

この時、白岩由吉は四十一歳になって

いた。無期懲役囚だから真面目につとめあげても十五年は刑務所暮らしをしなれば、仮釈放にはならない。

もう、六十歳まで、シヤバの空気は吸えないのだった。だが、仙台をすぎたが、彼は、行動を起す気配を見せなかった。

相変らず、退屈し、暇をもてあましている看守たちを相手に、もつとも自慢の網走刑務所破獄の話を開陳（かいちん）していた。

「あの、手枷はな、馬の蹄（ひづめ）の倍ぐれえの厚さがあつて、おらが振りまわすと相手の脳天ぐらい叩き割れるから。とごろでえ。野沢ちゅう親切な看守が一人おらのそばに来るぐれえでな。機会をねらつただが、そればかりは止めだあ。えれえ、世話になつたでな。糞小便垂れ流しだ。それに半年は風呂に入らねえがらもうルペン様だア。どつがの無人島の牢獄に一人つながれているようなものだべ。おらは一念岩も通す、つうことばが好きだア。見ろや、おらはちやんと岩よりかてえ鉄の手枷をぶっこわしただからなつ」

喋っているうちに、白岩由吉はますます自分が脱獄の名人で、英雄に思えてきた。絶対に不可能なことをやり遂げたわが超人ぶりに大いに彼は酔った。

それで話には随所に嘘もまじった。

王様気分はまだ続く。

「第四舎房の天窗を叩き割った時は、こ

の頭一つだべ。石頭だ。おらの拳は瓦の五枚や六枚重ねても、一発で全部真二つにする力があんだア。頭突きだって一発で相手が殺せる」

「お前はそういう術をどこで覚えたんだ」  
「はは、誰れも知らねが、わらし（こども）のどぎにな。八甲田山の山中で源蔵というマタギの男んどころで修業しだのよ。鳥落しの術も、瓦割りも、それにな、山おやじ熊を殺る時の武術もおら、その男に習っただア。そん代り、血の出るような修業だ、おらが不死身なのはマタギの頭目の源蔵爺のお陰だべ」  
「ふーむ」

看守長はすっかり感心させられる。

網走刑務所の天窗を破壊した時は、鉄枷の片割れ部分を用いている。

彼は大風呂敷を広げてみせたのだが、逃走理由を記した判決謄本にはさすがに、特製鉄具を装着したがために、それが脱獄の道具の一つとなったとは記されていない。

その一文は次のように記されている。

『網走刑務所独房第二十四舎房に収容され同時に逃走のおそれあるものとして強い手錠を掛けて置かれたので被告人は大いに憤り概して数回手錠を打ちこわした等のことから懲罰に付され普通人には用うべくもない特別に大きい手錠と足錠を掛け、また特に太い連鎖を腰に巻きつけたので身体の自由が効かず手錠は手首に



喰い込んで其処（そこ）が腐蝕して骨が露出しその傷からと身体が自由がきかないため不潔になつてこれたわきの下が糜爛（びらん）し之（これ）からと蛆（うじ）が湧き出るといふ有様であり、冬が来ても単衣一枚のまま置くという待遇を受けたので被告人は之では命にかかわるから何とかして脱出しようと考へ昭和十九年三月頃からその準備にとりかかり先ず手錠のナットを戻して之を外し視察窓の鉄格子枠の木部を留めてある稔針（ねじばり）を右手錠で抜いて何時でもこれを取り外せるようにして置き又手錠や足錠もボルトの処を柱や床に打ちつけて緩くして置き被告人に対して親切に取り扱った看守が勤務する時を避けて苛酷な処遇をしたと思ふ看守達に報復するためその者等が出揃ふ日を待っていたが同年八月二十六日その時期到来したので同夜九時頃担当看守の隙をうかがい特製戒具を外した上視察窓の鉄格子を取外し解錠のち通路採光窓に上り頭部で採光窓を破壊、逃走したものである』

この刑務報告の一文によれば、白岩由吉の頭突きの一撃は真実話として世間では通ることになる。

ぎらぎらと午後二時の太陽が今日も貨車の天蓋を灼（や）いていた。

暗い貨車の中であつたが、外の景色は緑が一杯ゆすばらしい田園風景に変わつて

いた。蔵王の山々が列なり、やがて安達太良山（あだたらやま）の山脈も見えてきた。黒磯の声も聞いた。意気旺んな地上の森羅万象が、夏陽に焙られてな

お一層の活気を日本列島にもたらしていた。

緑濃い夏草が列車が通過すると、一陣の風に煽られる。風が吹き過ぎると、猛った葉先が、まつすぐ天を突いた。

「：だどもおらどうしてもがまんできね。おらいま生きでるのが不思議でならね。暑いのはまだいいけど網走の寒さは零下十度になるべき。あの寒さで何人死んだがさ。おら、不死身だはで生き残ったけど。おらア、よくしゃべるでばな。こんなごと、珍らしはで。肉を切らせで骨を切る。あれだべな。あの鉄の手枷・足枷はめられたどきはおら、男らしく舌噛み切って死ぬ気だったども、畜生！こしだごとに人間一匹、負けらいねど、おら、頑張（けっば）ったよな。逃げねばあのまんま、死刑でもねのに凍え死んで、北山の無縁墓地に捨でられでいだもんなつ。あんだらのめえで悪いけども、看守いうは自分の身かわいいでな、みんなそうだども。あんどぎの川合所長がそうだべ。出世のためにはおらのような虫けらみでな男の命なんが問題じゃね、おらは、体の自由奪われで、殺されがげだア。あれは、絞首台の十三階段よりもつど酷え仕打ちだア。おら生きでらばで、こうやって口きげるべ。あのまんま

、おつ死んでだら、けえつ、あのおつがね鉄の手錠と足枷だけがこの世に残ったんだべなっ」

ごごとごとごとと列車は揺られている。小さな風抜きの窓が上部に一つだけあったが、風など入っては来ない。

夜になっていたので、貨車の中は真暗闇だった。看守たちは聞いているのか、いないのか声がない。

列車は東京を目指して、規則正しい軌轍音を刻んでいたが、精悍な風貌をした一人の男はただじっと闇を睨み据えていた。十二輛連結の、最後から三輛目、特別の「貸しきり」の車輛だった。

時が刻まれていけば、明けの朝がいつものようにやって来るが、まだ午前零時を過ぎたばかりの時刻であった

稀代の脱獄囚、白岩由吉、彼には虚名はいらない。闇を走り抜け、生きて来た男は目の前の敵だけに、たった一人で、憎しみの炎を燃やしてきたのだった。

それしか、自分が生きていることの実感を、彼はおのれのものにすることが出来なかつたのである。刑務所という閉鎖された社会の中での男の闘いでしかなかったが、ある時、たしかに彼は一人の英雄であり得たのだった。